

問題提起

豊後石仏造立の歴史的背景

別府大学助教授 飯沼賢司

豊後国には、日本の石仏の頂点にある臼杵磨崖仏・熊野磨崖仏などの多くの石仏群がある。中央からみるとこのような辺境地域に何故見事な石の文化が開いたのか不思議である。これが磨崖仏の謎である。しかし、平泉文化がそうであったように、この石仏の文化も当時の京の文化に直結していたことは、石を刻む技法が当時の最高水準の木彫技法を取り入れていることから明らかである。もちろん、この地域がもつ独自の石への信仰や石の文化という環境によって醸成されているとは間違いないが、やはり、中央の文化との関係が決定的要因をなしていることは否定できない。そこで、今回の報告では、中央と豊後国の関係に注目し、石仏が最も盛んに造られた十一世紀から十二世紀の豊後国の宗教的位置、政治的位置を明らかにして行く中で、磨崖仏造立の背景を探ってみることにしたい。

豊後磨崖仏の造立時期とその宗教的背景

豊後の磨崖仏の造立にどのような宗教的背景があるであろうか。現在残る寺や伝承や仏像様式などからみると、豊後の磨崖仏は、天台宗と結びついて成立したことはまちがいない。したがって、平安時代後期の北部九州の天台宗の宗教的展開の状況が問題となる。北部九州では、十一世紀後半から、八幡信仰と結合しながら、天台宗の発展がみられる。

永保元年（一〇八一）に宇佐宮弥勒寺の中に白河天皇の御願で新宝塔院が建立され大落慶供養がなされるが、この永保二年は、末法突入から三〇年目に当たり、この宝塔院の供養では、天台座主の指示によって法華供養法が宇佐宮の僧侶に授けられ、供養が行われた。これを機に九州の八幡信仰の拠点では、急激に天台の信仰が入り込んでいった（拙稿「権門として八幡宮寺の成立」『中世成立期の歴史像』所収）。これ以後、本格的に北部九州では天台僧主導の経塚造立や天台僧による寺や荘園の造立が展開してゆく。豊後国においても宇佐宮に近い、津波戸山に永保三年（一〇八三）に宇佐宮の関係者によって経塚が営まれ、国東の六郷山も十二世紀初頭には宇佐弥勒寺から自立し、天台六郷山として寺院としての組織を整備してゆくのである。豊後の石仏の造立もこのような北部九州への十一世紀末から十二世紀における、急激な天台信仰流入と対応するものと考えられる（拙稿「文書から見た六郷山の諸相―六郷山の成立―」『六郷山寺院遺構確認調査報告書』I所収）。したがって、この地域の石仏造立時期の上限も永保元年（一〇八一）を遡る可能性はないと考えられる。

豊後国衙と石仏

豊後の石仏の出発については、もっぱら臼杵磨崖仏に光があてられてきたが、九州における天台宗の展開が、白河天皇の御願の弥勒寺新宝塔院の建立に契機があったとすれば、院政を支える受領や国衙の勢力がこの動きに敏感に反応したはずであり、そこで、まず国衙周辺の岩屋寺や元町の石仏に注目する必要がある。

元町や岩屋寺の磨崖仏の造立については、十一世紀半ばから十二世紀までかなり、幅をもった見解が出されているが、仲嶺真信氏は、元町の磨崖仏を十一世紀後半から末に置き、臼杵山王石仏とともに豊後国で最も古い石仏と位置付けている（仲嶺真信「大分市元町石仏群の成立について」別府大学美学美術史学科『芸術学論叢』一一号所収）。美術史的見解の中身については云々できないが、先に述べた天台宗の流入と石仏の造立から推定した永保元年（一〇八一）以

降の造立という私見とも符合する。

元町磨崖仏は国分寺の奥の院ともいわれ、その位置から岩屋寺の一部を構成したと推定される。岩屋寺の後身は、上野の台地にある円寿寺である。この寺は惣社山の山号をもつ寺で、文保二年（一一三一）九月日の円寿寺御祈祷以下置文にも、寺領に「惣社」が記されている（円寿寺文書）。惣社は平安中期以降に官長国司（受領）権力の強化・集中の過程で、国内の神社のイデオロギー的統制が進み、有力神社の祭神が国衙に集められたものである。そのため、国司の政務場所の国庁の付近に置かれた場合が多く、岩屋寺の後身である円寿寺が惣社と深い関係があることは注目しなければならぬ。岩屋寺を円寿寺として再建したのは、十四世紀初頭の大友貞宗のときであり、全国的に守護所が国衙の機能を吸収してゆく時期に重なっている。このような事実から、岩屋寺は、国衙に直属する国庁寺のような存在であった可能性が極めて高い。

また、円寿寺は比叡山の道勇和尚を招き再建した寺で、慈覚大師（円仁）の定めた根本方式に則り、法華経書写を行う如法堂が置かれた。したがって、岩屋寺も天台系統の寺であったと推定されるが、岩屋寺に天台の如法信仰が取り入れられたのはいつであろう。それはやはり、この寺の国衙と密接な関係をもっていることと岩屋寺の場所が天台と密接な関係をもった宇佐八幡宮の所領勝津留の隣接地もしくはその内部に含まれる地であるという二点から、宇佐弥勒寺に新宝塔院が建立されることがこの寺の天台化と連動しており、それが岩屋寺や元町の磨崖仏の造立につながったとみている。それでは、国衙と円杵を繋ぐ糸は何であろうか。

豊後大神氏と円杵磨崖仏

豊後国の磨崖仏は、これまでの研究で主張されてきたように、その分布から見ても豊後大神氏の勢力下で造られたこととはまちがいない。豊後大神氏については、宇佐宮の神官である大神氏が宇佐氏との政争に敗れ、豊後に進出した説が

称えられたこともあったが、現在では、豊後大神氏は、中央官人である豊後介大神良臣の子惟基が豊後大野郡の郡領として土着し、子孫が大野郡・海部郡あまべ・大分郡・速見郡などに蟠踞したといわれる。渡辺澄夫や海老沢衷氏は、治承・寿永の内乱において豊後大神氏が源氏方に軍船をいち早く調達した動きから、国衙との関係に注目している（渡辺澄夫『源平の雄 緒方惟栄』）。

今日伝わる大神系統の諸系図によれば、阿南・種田わよた・三重・大野・緒方・臼杵さいき・佐伯・賀来・山香・都甲とこう・直入氏なおいりなどに分かれる。これらの名字は郷や荘の名前であり、この名字の地の郷司・荘官を務めていたと推定される。山香氏や直入氏は、系図などでも郷司や郡司職をもっていたと記され、もともとは大分郡・大野郡・海部郡・速見郡・直入郡などの郷の郷司職や郡司職を所持していたと推定される。

一般論として、十世紀以降では、次第に受領国司が一国の収納を国家に請け負う形式が確立し、受領によって国内の支配体制が改編され、郡司や郷司などの任免権は受領の手に帰す。十一世紀半ばころまでに、律令的な郡や郷の体制は解体し、国衙に直結する中世的な郡・郷に再編され、新たな郡司・郷司は、在庁官人として国衙に結集した。一宮などは、そのような国衙に結集する勢力の宗教的拠点となるといわれている。

豊後国では、大神氏は大分郡・海部郡・大野郡・速見郡・直入郡などの郡・郷司職を押さえ、一宮である由原宮ゆすはら（賀来社）に深く関与しており、大神氏の発展は、国衙を抜きに語ることができないのである。

すでに述べたように、永保元年（一一〇八）に白河天皇御願の弥勒寺新宝院が落慶供養されたことが、九州への天台流入の大きな契機となったが、これはまず、宇佐宮に深い関係をもち地域や国衙やその周辺で受け入れられ波及したと考えられる。岩屋寺関連の元町磨崖仏は国衙経由の天台信仰流入の産物として出現したとみられ、初期の臼杵の磨崖仏も、国衙に拠点をもつ大神氏がその影響をいち早く受け造立していったのではなからうか。

このように、磨崖仏造立の背景を豊後国衙との関連で理解する必要があるとれば、造立の最盛期である十二世紀段階

における国衙と中央の動向が問題となってくる。

摂関家と院の宗教政策と磨崖仏

豊後では保元の乱以前までは、摂関家の勢力が荘・公を問わず圧倒的であった。宇佐宮弥勒寺領のほとんどを占める荘園を管轄する弥勒寺喜多院の院司の任命権は十二世紀の初頭、摂関家の忠実の手にあり、宇佐宮も天養年中には忠実の娘高陽院泰子を本家としており、その荘務権は実質忠実にあった。白河院政期には院と対立し、その実権を奪われていた忠実は鳥羽院に変わると復権をし、豊後では、鳥羽院の初期、息子の忠通の家司である源季兼が国司に任命され、この時期白杵・戸次荘が立荘されたが、その後は、忠実の近臣である紀宗広や高階泰清が任命され、この時期に藤原頼長家領である植田荘が成立したとみらる。また、保元の乱の直前に忠実方の源為義の子息鎮西八郎為朝が豊後に下向し、豊後周辺の武士の組織化を行なっている。豊後は摂関家とって格別な国であったとみてまちがいない。この時期、白杵では、ホキ三尊などが作られるが、この仏像には忠実をパトロンとした院覚の作風の影響があると仲嶺真信氏は指摘している（仲嶺真信「白杵石仏群」『白杵石仏』所収）。

ところが、保元の乱を境に、忠実・頼長の勢力は豊後国から一掃される。これに代わって豊後の国務を二〇年以上掌握したのが、藤原頼輔である。頼輔は、摂関家の嫡流忠通系統の近衛家の家司でもなく、九条家の家司でもなく、親平家でもなく、確実な院近臣ともいえない人物であるが、治承・寿永の内乱では、反平家方それも院方として行動した。豊後磨崖仏の造立の主体者であった豊後大神氏は、明らかに頼輔家すなわち院の指示によって宇佐宮乱入や反平家の蜂起を行ったようである。当時後白河院は、鎌倉に距離をおきながら、院の軍事力として平泉と豊後に大きな期待をかけていた。十二世紀後半の磨崖仏は、摂関家の影が薄くなり、院・頼輔家の影響が強まる中で、豊後大神氏によって造立されていたたみられる。

仲嶺氏の見解によれば、十二世紀前半には、ホキ一群一龕・ホキ一群一龕・ホキ二群一龕（ホキ三尊）と来る流れが造られ、十二世紀後半には、古園・ホキ一群三龕・ホキ二群二龕（九体仏）の流れができたというが、その境目であるホキ三尊と古園の間には、様式的差異がみられるという（前掲仲嶺論文）。

曰杵磨崖仏にもこのように撰閲家と院という中央との政治関係がはっきりと読み取ることができる。

大神氏没落以降の石仏

治承・寿永の内乱で、当初は源氏方として活躍した大神氏は、後白河院と源頼朝の対立に巻き込まれ、没落の運命を辿った。当然、磨崖仏も終焉を迎えることになるが、美術史や考古学の調査によれば、なお鎌倉期に入っても、造立や整備が続くという結論を得ている（『曰杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』『大分歴史事典』など）。例えば、今回の保存・修復にともなう調査では、古園では、十二世紀半ばに遡る遺物と瓦としては鎌倉初期と後期のものが出土しており、平安後期の石仏造立の可能性を示すとともにその後も覆屋が鎌倉時期になって再建されたことが明らかである。また、昭和五十一年以降の公有化に伴う調査では、石仏の谷の反対側にある満月寺は、鎌倉初期と鎌倉後期・南北朝の二期の遺物にピークがあることが明らかにされており、古園の覆屋の造立と対応する建造が鎌倉期を中心に行われたことが明らかとなっている。これらの鎌倉時期の整備は誰によってなされたのであろうか。

文治元年（一一八五）十二月に源頼朝は、義経・行家に加担する公卿の追放と頼朝派の公卿の議奏公卿への採用を要求するとともに、義経・行家に加担した公卿の知行国の没収し、頼朝派の公卿に与えるように要求した。その最後に豊後国があり、頼朝自身の知行国として申請した（『吾妻鏡』）。ここに豊後国は、関東御分国の一つとなった。頼朝の御分国は、文治二年（一一八六）には、相模・武蔵・伊豆・駿河・上総・下総・信濃・越後・豊後の九カ国に定められているが（『吾妻鏡』）、豊後以外は、鎌倉のに近い東国の国である。頼朝が豊後をみずからの直轄においたのは、国主藤

原頼輔・頼経父子が義経に与同し、国人緒方惟栄らが義経の九州下向を先導するなどし、この国が義経派の拠点となっていたからである。また、豊後は奥州平泉とともに後白河院が鎌倉と対抗するための最後の切り札となっており、これは、後白河院の策謀へ楔を打つ意味をもっていたのである。

豊後を得た頼朝は、側近の毛呂太郎藤原季光を守に任命し、腹心の天野遠景や中原親能を鎮西奉行に当て、頼輔・白杵系大神氏の国衙からの一掃を進めた。これによって、大神氏の勢力は後退し、石仏も消え去る運命にあるかに見えたが、頼朝は法華経を深く信じることもあり、大神氏の遺産を破壊することなく積極的に保護したと考えられる。頼朝が再建を行ったという記録を見いだすことはできないが、文治五年（一一八九）に平泉に入った頼朝は、平泉の寺社堂舎の寺領の安堵・僧侶の庇護など厚い保護の方針をすぐさま打ち出し、建久六年には、奥州総奉行に寺社の修理を命じているように（『吾妻鏡』）、頼朝が天台如法信仰の下で育った石仏文化に庇護を与えなかったはずはない。

また、白杵荘は、皇嘉門院から九条兼実家に伝えられた荘園であり、兼実の弟慈円は天台座主として無動寺を管領し、豊後国六郷山を支配していた。慈円の下で、六郷山は再編が行われており、豊後の天台系統のお寺も幕府・九条家・延暦寺のラインで再編・再建が進められたとみられる。

白杵における鎌倉初期の整備は、このような流れの中で行われたとみてほぼ間違いないであろう。

磨崖仏・石仏の文化は大分の独自の地方文化の一つである。しかし、この独自の石の文化の背後にもダイナミックな中央の歴史の流れが連関している。そのことを解明することによって沈黙の石の仏も私たちに歴史を語りかけてくれるに違いない。